

# はんない

## ～京都：東寺編～

最終日、新幹線に乗車前に訪れるのが、京都駅のすぐ南西に位置する「東寺」です。このお寺は、平安京への入り口である羅城門の左右に築かれた東西の寺の一つで、国家鎮護の為に造営されたので、正式名称は「教王護国寺」と言います。東寺と西寺については、こんな話が残っています。昔、今日に干ばつが続いた時、朝廷が西寺の偉いお坊さんに雨乞いの祈禱をさせたが、雨は降らなかった。しかし、東寺のお坊さんに頼んだら雨が急に降り出したという伝説があります。そのお坊さんこそ、「弘法大師」の名で親しまれている空海。現世利益を叶える密教を日本にもたらした空海は、占星術や天文学的な知識を豊富に持っていたんでしょね。その後、西寺は鎌倉初期には廃れてしまいました。



ところで、平安京がつけられた当初、京には、この東寺と西寺しかお寺はなかったのです。つまり、当時の京とは、「お寺のない町」だったのです。意外かもしれませんが、平安京を開いた桓武天皇は、奈良時代に道鏡など政界へ進出してきた仏教勢力を避ける為に、「お寺のない町」を新しい都として選んだのです。今、京都にあるお寺は、そのほとんどが都が造営された後につくられたものなのです。

東寺と言えば、京都駅からも見える日本一大きな高さ57mの五重塔が有名です。でも、空海は、なぜこんなランドマークタワーを造ったのでしょうか。元々、仏塔には、お釈迦様が亡くなる時に弟子達に分配したと言われるお釈迦様のお骨、つまり仏舍利（ぶっしゃり [荼毘に付された後の骨にご飯粒が似ていることから、私たちはお寿司のご飯粒を「舍利」と呼んでいるが、何と私たちは有り難いものを食しているのか]）が祀られていました。故に昔は、お寺の中央にあり、お寺の中で最も重要視された施設でした。しかし、シルクロードを通じギリシアの偶像崇拜の文化が東方にも伝わってくると、国内でもかつての土偶崇拜の文化が芽を膨らませ、仏像が盛んに造られるようになりました。すると、お寺の中でも、金色に光り輝くお釈迦様の偶像を安置する金堂が、最重要施設となり、仏塔は飾りのような存在になっていったのです（ちなみに、インドの言葉で仏塔は「ストゥーパ」、この言葉に由来するのがお墓にある「卒塔婆（そとば）」）。つまり、お墓の中にもお釈迦様を祀った仏塔があるのです）。しかし、空海は、その原点に戻って、お釈迦様の仏舍利を祀った仏塔を、より多くの人に拜んでもらおうと、できる限り高層にしたと言われます。しかし、高層が故に五重塔は何度も落雷の為に焼失してしまいました（現在の塔は江戸時代に徳川家光が再建した）。

実は境内は、この五重塔以外にも国宝のオンパレードなのです。例えば、講堂内部には、世にも珍しい立体曼荼羅（まんだら）があります。そもそも曼荼羅とは、言葉では言い表せない密教の世界観を図で示したのですが、これを仏像で表現したものが立体曼荼羅です。密教の最高神である大日如来を中心に、仏教界を守護する筋肉隆々の21体の仏様がひしめき合っていて、



講堂内部は、汗臭い体育会系の選手控室みたいな感じです。この 21 体、それまでの奈良時代の仏様にはあまり見られない多面広臂（顔が複数、腕も四本以上）の姿が特徴的で、おそらく空海から仏像の製作依頼を受けた仏師たちも、この異様な姿をどう表したら良いのか大変戸惑ったことだろうと思われます。様々な表情の 21 体、怒ったり、癒したり、慈悲の姿になったりと、そんなふういろいろな心に変化するところは、見ている側、つまり我々「人間」そのものにも当てはまります。空海は、誰の心の中に「仏性」というものがあり、それを私たちに気付かせるために、この立体曼荼羅をつくったとも言われます。空海の書物の中にも、「信心を持つものは平等に仏性を持ち、即身成仏することが出来る」という言葉があります。



また、金堂には、ご本尊として薬師三尊像が安置されています。三尊の真ん中には、仏様の世界で一番格上で、既に悟りを得た釈迦を表現している如来（病気を癒やしてくれる薬師如来）が位置しています。如来らしく、頭の形は脳

みそがいっぱいに詰まった肉髻で、その髪型は粒が大きいパンチパーマ（螺髪「らはつ」）、顔つきはやや平板で日本人っぽく、でも右手は、「恐れなくていいよ」と私たちに励ましてくれる施無畏印、そして左手も、「願いは叶えてあげるから」との与願印の印相をしている。また、この如来の両脇には、如来のワンランク下が故に座ることを許されていない菩薩が立っています。菩薩は、まだ悟り切れていない王子の頃の釈迦を表現していますから、外見を気にして冠や首輪や腕輪を身につけ、自分を着飾ろうとしています。皆さんは如何ですか？ちなみに、左側の日光菩薩は、太陽の如く光を照らして苦しみの闇を消し、右側の月光菩薩は、月の光のようなやさ

しい慈しみの心で 煩惱を消すと言われますが、実は 2 人ともまだまだ修行の身の上なのです。ところで、如来の台座の下をよく見ると、如来をお支えすべく必死に歯を食いしばっている十二神将がそれぞれの方角に並んでいます。仏教の世界も、現在の世の中と同じで階層化社会なんですね。私は、この十二神将たちにサラリーマンの哀愁を覚えます。

最後に、東寺と言えば「弘法市」が有名で、弘法大師がなくなられた毎月 21 日に「弘法さん」と呼ばれる市がたちます。今回、私たちが訪れるのは、15 日ですからちょっと惜しかったですね。でも、東寺の売店は常時開いており、そこには、「曼荼羅下敷き」や「曼荼羅ハンカチ」が売られています。皆さんも弘法大師の功德に預かることができるかもしれませんね。

